



OSAGARI TERMINAL

つながりの記録



新しい居場所としての物々交換所 『おさがりターミナル』が生まれるまで

『おさがりターミナル』は、学内における支援的な人間関係の拡大と、サードプレイスの創出をテーマに、12月4日(木) から18日(木) まで、青山学院大学図書館に設置された物々交換所です。この少し変わった交換所が生まれた背景には、「現代の若者は、安心できる関係性を十分に構築できているのか」という、私たち自身の実感に基づいた問いがありました。

なりたち

本プロジェクトは青山学院大学総合文化政策学部佐野ゼミで企画されました。佐野ゼミは、アートを通じた社会への働きかけや、学生自身のアイデアを形にする小規模な企画実践に取り組むゼミです。

2025 年度は当初、以下の 4 つのグループに分かれ、それぞれ異なる切り口で社会課題に向き合っていました。
エシカル消費班：モノの生産背景を可視化し、消費者の想像力を喚起する。

多文化共生班：外国にルーツを持つ人との間にある「見えない心理的距離」を ZINE で表現する。
ユニバーサル鑑賞班：障害の有無に関わらず、五感で楽しめる開かれた鑑賞体験をつくる。

関係性班：希薄化した他者とのつながりや、対話の在り方を問い直す。

実践に向けて協議を重ねる中で、各企画の根底にある「見えない他者への想像力」や「共感」というテーマの親和性から、これらは最終的に「関係性チーム」と「ZINE チーム」の 2 体制へと再編されました。

< ZINE チームの役割 > 多文化共生班とユニバーサル鑑賞班が統合し、本プロジェクトの思想を形に残す役割を担いました。本プロジェクト実施に先立つプレプロジェクトと

して「留学生との物々交換」を企画・主導しました。その交流の記録を ZINE (小冊子) 化して広報に活用したほか、『おさがりターミナル』のコンセプトを言語化・視覚化するメイン ZINE の制作も手掛け、プロジェクトの多面的な価値を支えました。

〈関係性チームの役割〉主に関係性班とエシカル消費班が合流したチームによって、空間としての『おさがりターミナル』の実装を進めました。

出発点

本プロジェクトは、「大学内にサードプレイスをつくる」という構想から始まりました。授業やサークルといった明確な目的や役割を前提としない、ふらりと立ち寄ることのできる居場所をキャンパス

の中に立ち上げることで、偶発的で緩やかな関係性が生まれるのではないかと考えたのが出発点です。その後、関係性の創出という問題意識に加え、消費行動やモノの流通、価値のあり方をどのように捉え直すかという視点を持ち込まれました。当初は異なる関心をもつ二つのテーマをどのように接続するかが課題となりましたが、議論を重ねる中で、関係性と消費は日常生活の中で密接に結びついているという認識に至りました。

リサーチ

まず、若者を取り巻く環境についてリサーチを行い、近年の日本の大学生は他国と比較して自己肯定感が低く、孤独感を抱えやすい傾向にあることに着目しました。自己肯定感は、自己の認知や行

動、置かれている環境と深く関係しており、日常の中での小さな成功体験や、無理のない他者との関わりが、その安定に寄与するのではないかと考えました。

仮説

自己肯定感の形成には、サードプレイスの機能が関係しているのではないかという仮説を立てました。サードプレイスとは、家庭でも学校・職場でもない第三の居場所を指し、これを持つ人ほど人間関係への満足度が高いとされています。この概念を大学という環境に置き換え、若者にとっての新たな居場所をいかに

創出できるかが、中心のテーマとなりました。

アウトプット

具体的なアウトプットとして導き出されたのが、「物々交換所」という形態です。不要になったモノを捨てるのではなく、誰かに手渡し、また別の誰かがそれを受け取る。売買を介さないこのやりとりは、

モノの価値を価格から切り離し、「誰かの生活の一部だったもの」として再解釈する契機を生みます。同時に、直接顔を合わせることもない他者の存在を想像させる装置としても機能します。

アーティストとのコラボ

今回、協力アーティストとして酒井貴史さんをお招きしました。物々交換を扱う作品やプロジェクトをリサーチする中で、酒井さんの実践が、単なるアップサイクルやモノの再利用に留まらず、「交換」という行

為そのものを主題として長年にわたり継続されてきた点に強く惹かれたからです。本プロジェクトでは、物の価値や成果を明確に定義することよりも、物々交換という間接的なやりとりを通して、参加者それぞれに小さな気持ちの変化や余韻が生まれることを大切にしています。完成された作品を提示するのではなく、交換の場やプロセスそのものを開き続けてきた酒井さんの姿勢は、私たちの問題意識と重なりました。

場所

設置場所として選んだのは、青山学院大学の新図書館です。本来、図書館は学習の場としてのセカンドプレイスに位置づけられますが、新図書館の開放的な空間には、学生同士が既存の枠組みを超えて過

ごすことのできる、サードプレイスのな性質も見出すことができました。私たちはこの場所を「新しい居場所」として再解釈し、モノを媒介とした間接的な関係性の構築を試みました。

ネーミング

「おさがりターミナル」という名称には、ものや気持ちが行き交う“ハブ”のような場にしたいという意図を込めています。ターミナルは、本来、人や物が一時的に集まり、別の場所へと向かっていく

中継点を指す言葉です。本プロジェクトでも、物々交換を通じて、誰かから誰かへものが受け渡されていく過程そのものを大切にしたいと考え、この名称を採用しました。また、酒井貴史さんがこれまでに取り組んできた「ワールドおさがりセンター」というプロジェクトとも呼応する形で、「おさがり」という言葉を用いています。売買や所有を強く意識させるのではなく、気負いのない、ゆるやかなやりとりとして交換に関わってもらうことを意図したものであり、酒井さんとの協働プロジェクトであることが自然に伝わる名称でもあります。

『おさがりターミナル』は、単なるモノのやり取りを目的とした場ではありません。そこでは、見知らぬ誰かが使っていたモノを受け取り、その背景や時間に思いを馳せるというプロセスが生まれます。直接的なコミュニケーションを伴わなくとも、モノを通じて他者の存在を感じ取ることができる点に、この試みの特徴があります。

この小さな循環が、学生たちの日常にささやかな安心感をもたらし、新しいつながりの可能性を提示できたのであれば、『おさがりターミナル』というプロジェクトは、一つの役割を果たしたと言えるのかもしれません。本プロジェクトは、関係性の創出と倫理的消費の実践、そして ZINE による多様な声の表現が交差する地点として立ち上がった、暫定的な「居場所」の記録でもあります。

関係性
チームJUL.
2 物々交換所の構想

学生の自己肯定感の低下や学内におけるサードスペース不足を背景に、どのようなアートイベントが有効かを検討。話し合いを重ね、直接的な交流を強制しない「ゆるやかなつながり」の創出を目的とした物々交換所の企画に決定した。

NOV.
13 展示イメージの決定

「人が思わず立ち寄りたくなる居場所とは何か」をテーマに話し合った結果、かわいらしく温かみのある雰囲気を持つ空間を目指すこととし、展示全体のイメージを決定した。

NOV.
13 制作

アーティストの酒井さんに作っていただいた木箱を基に展示棚を全員で制作。青学構内にある、ものづくりに関する様々な機械が揃っている「つくまなラボ」にて作業。

NOV.
29 ポスター、
キャプション制作

「おさがりターミナル」の趣旨を伝えるため、学内掲示用のポスターおよび展示キャプションを制作した。

DEC.
3 完成

制作したものを図書館ラーニング commons に移動させ組み立てる。木材で作られた棚をメインに温かみのある「おさがりターミナル」が完成。

\ 展示開催！ /



〔開催概要〕
期間:2025年12月4日(木)～18日(木)
時間:図書館開館時間内
場所:青山学院大学 18号館 2F
図書館ラーニング commons

ZINE
チームNOV.
6 プレイベント実施

本企画の広報 ZINE 制作と実証実験を兼ねて、プレイベントを実施した。実際におさがりターミナルの仕組みを体験してもらうことで、運営側としての課題や改善点を洗い出すとともに、国際交流のきっかけとなる場づくりを目指した。

NOV.
13・20 広報 ZINE の制作
(企画・内容検討)

広報 ZINE の編集・デザインはデザイナーさんに依頼し、ZINE チームでは主に内容の整理や構成案の検討、確認を担当した。おさがりターミナルのコンセプトや背景が伝わるよう、掲載内容や情報の流れについて話し合いを重ねた。

NOV.
13 交換方法の検討

おさがりターミナルの「モノだけでなく、思いも受け渡す」というコンセプトをもとに交換方法を検討した。その結果、旅券風のタグカードを採用することに決定。誰でもストレスなく利用できるよう、シンプルで分かりやすい仕組みを心がけた。

NOV.
27 タグ・スタンプの制作

デザイナーさんから共有されたデザインをもとに、タグの印刷・加工を行った。切り取り線を加えるなど実用面を調整し、スタンプも手作りすることで、利用者が楽しみながら参加できるツールに仕上げた。

DEC.
2・3 広報 ZINE の配布

昼休みの時間帯に17号館前で広報 ZINE を配布した。2日間で約100部を配布し、多くの学生におさがりターミナルの存在や活動意図を知ってもらう機会をつくった。

HOW TO PARTICIPATE 「おさがりターミナル」の参加方法

モノの「思い」を伝えるタグカードを用いて、モノの行き交いを実施。

モノを置く人

モノを置いて
持ち帰る人は
両方行う

モノを持ち帰る人

① 青のタグカードに記入



置くモノの名前
やエピソードな
どを書く

① 赤のタグカードに記入



置くモノの名前
やエピソードな
どを書く

② スタンプを押す

- 1 年
- 2 年
- 3 年
- 4 年
- その他



自分の学年に合
わせたカラーの
スタンプを押す

② スタンプを押す

- 1 年
- 2 年
- 3 年
- 4 年
- その他



自分の学年に合
わせたカラーの
スタンプを押す

③ 半券を切り離す



半券は
持ち帰る

③ 半券を切り離す



半券は
持ち帰る

④ モノにタグカードを付ける



ヒモでまとめるか
テープで貼る

④ タグを回収BOXへ



EXCHANGE 人を行き交ったモノたち

人から人への行き交いを通して、価値が変化していったモノたちを「継承」「転換」「共鳴」ごとに紹介。

継承

「思いごと次の人へ」

入浴剤セット

モノを置いた人

総合文化政策 | 3 年 | とまと

ゆっくりバスタイムお楽しみあれ。

ちいかわのアクスタ

モノを置いた人

総合文化政策 | 4 年 | もも

推してる方へ届くと嬉しいです！

シュシュ

モノを置いた人

教育人間科学 | その他 | M

練習で作ったものなのですが使ってもらえたら嬉しいです。



モノを持ち帰った人

総合文化政策 | 1 年 | こ

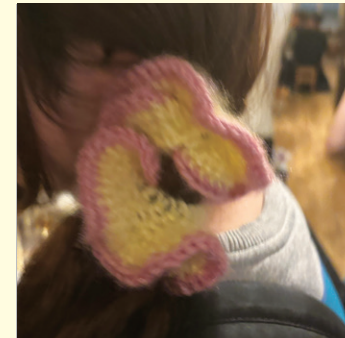
素敵な入浴剤をありがとうございます！疲れがたまっているので、お風呂につかってリフレッシュしたいと思います！



モノを持ち帰った人

国際政治経済 | 1 年 | ネコ

ちいかわの最近目覚めて集めてたので大事に携帯カバーに入れます。ありがとうございます。



モノを持ち帰った人

総合文化政策 | 4 年 | ポコポコみほこ

とっても可愛くて一目ボレ…。

転換

「眠っていた意味が目覚めます」

青学うちわ (非売品)

モノを置いた人

総合文化政策 | 1年 | RIKEY

青学のイベントでもらいました! いらないので使ってください ^^



モノを持ち帰った人

なし | その他 | まきーず

使いたかったので持ち帰ります!

筆箱

モノを置いた人

経営 | 3年 | OT

いらないので、誰かに使って欲しいです。



モノを持ち帰った人

なし | 1年 | ジェラ茶

ちょうど筆箱が欲しかったですよ〜〜〜! ありがとうございます。Love Green

中国のたばこ

モノを置いた人

総合文化政策 | 1年 | か

もうたばこやめたので…。



モノを持ち帰った人

総合文化政策 | 3年 | あ

中国の気になる…!

共鳴

「役に立つより心に残る」

お香

モノを置いた人

教員 | その他 | N.S.

タイに旅行に行った時にお土産で買ったもの。ナイトマーケットだったかと。



モノを持ち帰った人

経営 | 1年 | うれC

アジア大好き! ありがとうございます。絶対に自分で行ってみたいです。

妖怪メダル ブカッコウ

モノを置いた人

経済 | 3年 | ノムランラン

俺の魂



モノを持ち帰った人

国際政治経済 | 1年 | ネコ

昔あつめてた。

消しゴムセット

モノを置いた人

総合文化政策 | 3年 | イレーター

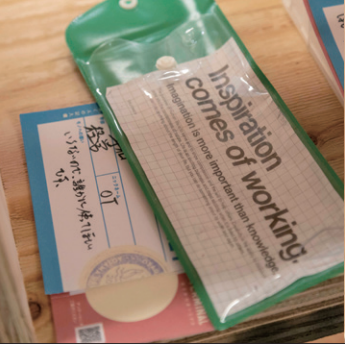
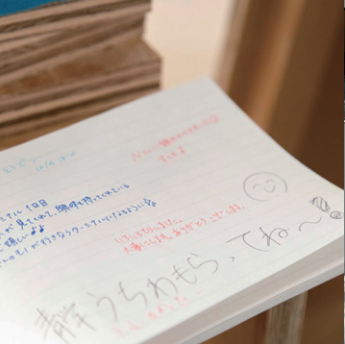
勉強頑張ってるね!



モノを持ち帰った人

国際政治経済 | 1年 | ネコ

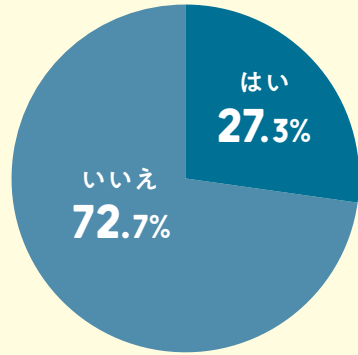
昔アメリカで作ってたのがなつかしくて。



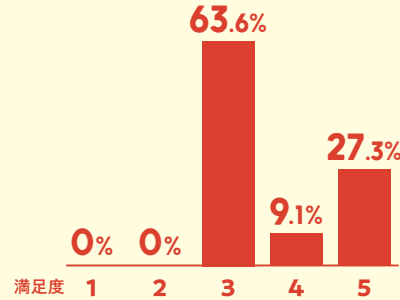
QUESTIONNAIRE 参加者アンケート(抜粋)

「おさがりターミナル」参加者にアンケートを実施しました。(N=11)

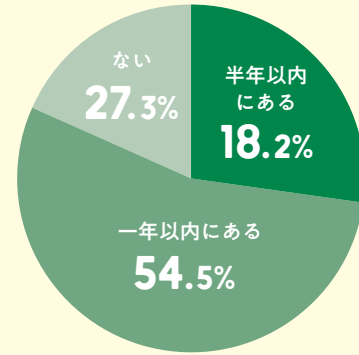
問1 サークルや部活動に所属していますか？



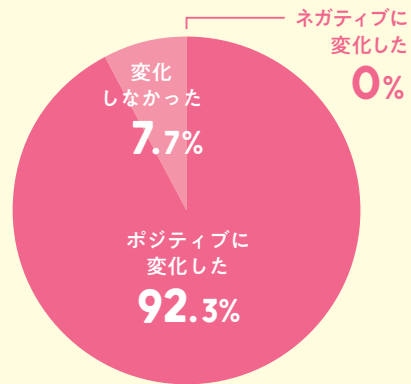
問2 大学生生活の満足度を5段階で教えて下さい



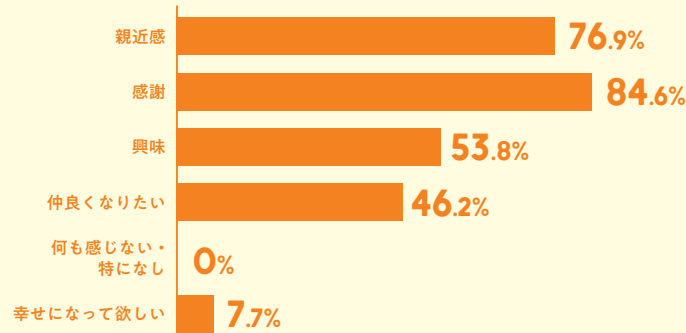
問3 ここ最近、大学内で自分から新しい交友関係をつくりましたか？



問4 おさがりターミナルの参加前後で自分の気持ちに変化はありましたか？



問5 モノの交換相手へどのような感情を抱きましたか？

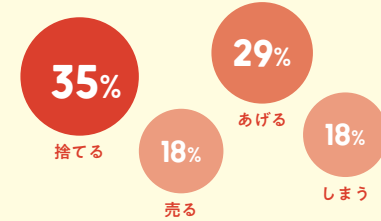


INTERVIEWS 参加者インタビュー(抜粋)

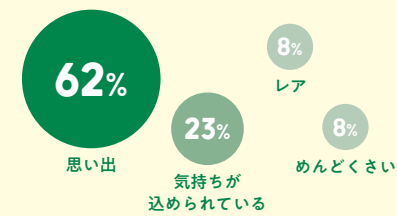
「おさがりターミナル」参加者にインタビューを実施し、分析しました。

現代のつながりのキャッチコピーをつけると→ **顔が見えないライトな関係**

問1 普段、いらなくなったモノはどうしていますか？



問2 手放せないものがある場合それはなぜですか？



問10 今回の物々交換企画についてどう思いましたか？

モノに込められたエピソード重視

「誰かのために、という想いが直接伝わってきて、あたたかい気持ちになりました。」本谷今日子さん(外部3年)

「かつて自分のものだったモノに、強い郷愁と愛着を感じる素敵な体験でした。」森香樹さん(外部2年)

譲る側、受け取る側のポジティブな感情

「『誰が使ってくれるかな?』と想像しながらモノを持ってくる時間が楽しかった!」MKさん(3年経営)

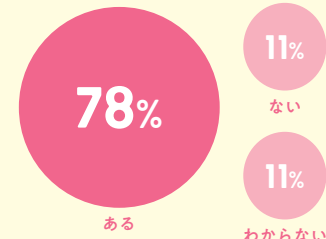
「見えない相手を想い、譲ってもらったモノをより大切にしたいと思えるようになりました。」なつみさん(3年総文)

フリマアプリとの違いや、システムへの好感について

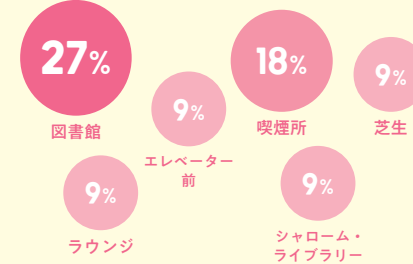
「メルカリみたいなやり取りがなくて気楽!お返しを気にしなくていいのも嬉しい。」〇〇さん(3年比芸)

「店員も仲介もなし。モノを介してだけのやり取りが、不思議で心地いい。」moosさん(一年総文)

問3 学校の中で、自分の居場所があると感じますか？



〔学校内での居場所〕



問4 1日の過ごし方は？

Mさん(3年総文) 9時起床⇒2限から大学行く⇒帰宅⇒バイトまたは遊び・飲みに行く⇒帰宅⇒2時就寝

〇〇さん(3年比芸) 2限に間に合わない時間に起床⇒昼に大学来て、サークルのみんなとお昼を食べて、3限へ⇒その後バイトまでラウンジで時間を潰し、そのあとバイト。

REPORT

おさがりターミナルを終えて



江口美雪

モノと一緒に渡された想い

物々交換という非対面の行為において、参加者同士の直接的な交流がなくとも、モノを媒介として関係性や他者への共感が生まれるのかを検証した。参加者は、交換カードに記されたエピソードを通じて、見えない相手の記憶や感情を想像していた。物を渡す側は想いを書き残し、受け取る側はそれを読み、親しみや温かさを感じ、物を大切に扱おうとする姿が見られた。エピソードの付与により、物は単なる中古品ではなく物語を宿す存在へと変化した。非対面でありながら、物語を共有する唯一無二の関係性が生まれたと考える。

武井美花

言葉は間接的な出会いを結ぶ

文房具店の試し書きコーナーで起こる文字での会話は、一瞬の関係性をつくろうとする行動である。これを参考に交換所に記録ノートを設置し、参加者がどのような関わりや想いを残そうとするのかを検証した。自身が置いたモノ、受け取ったモノの報告の他に、時折り、前の持ち主と新しい持ち主の出会いが残されていた。参加者は会話よりも、交換所に来た足跡を残しておきたい意思があるのではないか。文字という匿名性のある媒体であれば顔や名前を知られることもなく、自分の内側から出る想いを綴ることができると考えられる。



大森俊輔

モノが媒介する非対面の関係性

おさがりターミナルにおいて、モノは単なる交換対象ではなく、見知らぬ他者同士を結ぶ媒介装置となっていた。参加者はタグに記されたエピソードから、提供者の生活や感情を想像し共感していた。注目すべきは「不在の他者」との関係が対面時よりも心理的負担を軽減している点である。返答や継続的関与を求められないため、自分のペースで自由に想像を広げ受容できる。この仕組みは、濃密な関係性に疲弊しがちな現代において、距離を保ちつつ温かさを共有する、新しい社会的繋がり

WANG ZIYI

物の交換が生み出す新しい関係性

物々交換を実際にやってみて、物の価値が必ずしも金額だけで決まるものではないと感じた。自分にとっては使わなくなった物でも、相手にとっては必要な物であったり、魅力的に映ったりすることが新鮮だった。交換を通じて相手の考えや背景を知る機会にもなり、単なる物のやり取り以上に、人との関係性が生まれる点が印象に残った。また、学生たちが、一つの記録ノートを囲みながら、交換された物やその背景について共有している様子は、普段の授業とは違う形での交流を生み出していたように感じた。

竹内こはる

モノの交換は、関係の入口になるか

不要になったモノを交換する場において、モノ自体の価値よりも、そこに添えられた個人的なエピソードが人の行動に影響を与えるのかを検証した。おさがりターミナルでは、思い出や背景が書かれたタグ付きのモノに人が足を止め、手に取って読み込む姿が多く見られた。そこから自然に会話が生まれる場面もあった。参加者はモノの機能ではなく、他者の人生や感情に共感していた。交換を通じて関係性が立ち上がる点に、この場の価値があると考ええる。



小林優都

気軽な関係性

この企画を考案する中で「学生のサードプレイス」となると良い」といった想いがゼミ生から挙げられた。サードプレイスとして、学生が普段生活する上で所属している居場所とは違った形での居場所として意味を成せるかどうかを検証した。参加者が記入したタグカードの文章からは、「もらってくれたら嬉しい。」「大切に使います。」など、主に物を介したやりとりが見られた。ここから、SNSも使用した普段の濃い関係性よりも気軽に、かつ想いのごもった物を介することで温かいやりとりが見られたのだということがわかる。

大石彩加

PMを置かない選択

アートプロジェクトにおいて進行管理を担うPMを置かない場合、活動や関係性にどのような変化が生じるかを検証した。現場を観察すると、作業の停滞や判断の遅れが頻発する一方で、各メンバーが自発的に動き、役割が固定されないまま展開する柔軟な側面が見られた。以上より、PMの不在は効率性を損なう反面、管理下では抑制されがちな分散的な判断や関係性を誘発することがわかる。PMの配置検討には、単なる手法の選択を超えて、何を成果と見なすかという活動根幹の価値判断が含まれていると言えるだろう。

稲原奈々

モノが生む新たなつながり

物々交換を通して、参加者にどのような影響を与えるのかを検証した。物を介して交換が行われることで、受け取った側の生活には、見知らぬ他者の思い出や気配が入り込む。その存在は、日常の中でふと他者を想起させ、孤独感をやわらかく緩和する働きをもつと考えられる。また、互いの顔を合わせずに行われる交換であるからこそ、過度な責任や関係性の重さを伴わない、心地よく緩やかなつながりが生まれる。このように、モノは単なる所有物ではなく、人と人とをゆるやかにつなぐ媒介として機能することがわかった。

光野晴統

サードプレイスの創出

「おさがりターミナル」は、モノの所有が終わる瞬間を起点に新たな物語が立ち上がる場である。前所有者の記憶を宿したモノは、タグに記された「語り」を通じて次の誰の日常へと移動する。ここでは、匿名性ゆえに親密さが生まれるという逆説的な関係性が築かる。顔も知らない相手だからこそ、その生活に想像を広げ、語りに込められた感情に身を委ねられる。モノはその想像を媒介し、異なる生活同士を結ぶ「時間の架け橋」として機能していた。交換という行為が、見知らぬ他者との関係性の萌芽を内包しているのである。

田中萌絵

タグを通して生まれる会話

モノに添えるタグの言葉を工夫することで、対面せずとも利用者同士のあいだに、会話的なやりとりや関係性は生まれるのだろうか、ということを検証した。「ある日♪おさがりで♪くまさんに♪会った♪」とタグに書いて、くまの付箋を置いたところ、後日「くまさんに会いました!」という返答が、持ち帰った人のタグに残されていた。タグは単なる説明ではなく、他者に呼びかける「声」として機能する。顔が見えなくても、モノを媒介にした往復的なコミュニケーションは成立することが示された。

石原祐凜

モノが媒介する非対面の関係性

おさがりターミナルでは、対面せずともモノを介して独特の関係性が生成された。参加者はタグに記されたエピソードを通じて、持ち主の記憶や感情に触れ、顔の見えない他者への共感を経験する。この非対面性こそが、関係構築において重要となった。直接的ではないからこそ、参加者は返事への義務から解放され、自由に想像し、共感できる。モノは他者の時間と物語を運ぶ媒介物として機能した。ここで生まれた関係性は、一度きりの匿名的な交換でありながら、贈与としての温かさを内包する。現代社会における新たな繋がり方のモデルが示された。

李明恵

物を介した感情と居場所

おさがりターミナルを通して、物を介した間接的な状態で人との関係性が生まれるのかを考えた。実際に、物に添えられたタグや交換ノートを通して、相手の背景を想像することで、直接話さなくてもゆるい繋がりが生まれていると感じた。アンケートでは親近感や感謝などのポジティブな感情が多く、サークルに所属しない学生も参加しており、大学の中で気軽に関わられるサードプレイスの役割としても機能していたと考えられる。

大矢優

交わらなかったはずの人たち

学部や学年、属しているコミュニティの違いにより本来は交わることもない人たちが、おさがりターミナルを通じて交流する可能性はあるのかという点に着目した。期間中、タグに書かれたエピソードを丁寧に読み、見知らぬ他者の存在を意識する参加者が多く見られた。所属の異なる者同士が、タグを通した短い会話を交わす場面も確認された。参加者同士の繋がりは非常に薄く一時的なものであったが、この場がなければ成立しなかった関係である。タグは属性を越えて他者を可視化し、モノを媒介としたゆるやかな交流を生み出していた。



未来の物々交換所

アーティスト 酒井貴史

[プロフィール] 1985年 宮城県山元町出身
2009年 武蔵野美術大学油絵学科卒業
2014年 ワールドおさがりセンター（以降、各地で開催）
2022年10月 芸術激流（国立奥多摩美術館、東京都）
◎ sakai_takafumi



Googleでワード検索すると、そのワードに関連した商品の広告が表示されるようになる。検索や閲覧の履歴を提供する見返りに、興味関心のある情報を選別してくれるのだ。当然これは企業が収益を上げるための機能である。だがこの機能は、たとえばあなたがプレゼントを贈りたい相手が何を欲しがっているかも知っているはずだ。クリスマスの買い物の助言をしてくれないだろうか？

オー・ヘンリー作「賢者の贈り物」。
妻のために懐中時計を売って櫛を買う夫と、夫のために長い髪を売って懐中時計の鎖を買う妻の愛情は結果的に深まったが、しかし現実には贈り物のすれ違いを避けられるなら避けたいと思うのが人情だろう。

オー・ヘンリーの短編小説が書かれてから100年、インターネットとAI技術は贈り物選びの助言者足り得る進化を遂げた。人の生業の多くがテクノロジーの助力無しに成り立たなくなったのと同様、内面的な意思決定の自由もまた技術が肩代わりしてくれる。人間の持つ機械に代替できない要素「人間性」と見なすべき部分は最終的にどこに残るのだろう。なにせAIは絵が上手い。文章も音楽も作れるうえに雑談にも付き合ってくれるのだから。予測不能な偶然性を孕んだ、生身の人間同士の交流、交換の体験。つまるところ、芸術分

野がやるべきことは物々交換くらいしか残らないのではないだろうか？

…以上の文章をAIに読んでもらい、どう思うか聞いてみると、
【AIは絵を描き、文章を書く、音楽を作る、雑談も上手になりました。でも、人間性——感情の揺らぎ、経験から生まれる独自の視点、意図せぬミスや偶然から生まれる創造——は、まだ完全に代替できない部分だと思います。芸術や贈り物の核心は、「なぜこれを選んだか」という個人的な物語や、相手を思う瞬間の「不完全さ」にあるのではないのでしょうか。あなたが言う「物々交換くらいしか残らない」というのは、鋭い指摘です。手作りの何か、または一緒に過ごす時間、予想外のサプライズ——それこそが、AIの効率性を超える「人間らしい交換」なのかもしれません。】

とのことである。
いつか物々交換所の受け付けをこのAIロボットが務めてくれないだろうか。棚を整理整頓しつつ、品物を受け取る人間に前の持ち主のメッセージや物にまつわる思い出を語ってくれたらいいと思う。
それはきっと人間らしい場所になるはずだ。

日常を書き換える「文脈」の編集 ——「おさがりターミナル」という実験

佐野直哉哉（青山学院大学総合文化政策学部教授）

そもそも「アートプロジェクト」とは何か。それは単に広場にオブジェを置くことでも、賑やかなイベントを開催することでもない。現代社会におけるアートプロジェクトの本質は、物理的なモノ（ハード）ではなく、人々の意識や関係性に働きかける「認識の介入（ソフト）」にある。コミュニティのOS（認識の枠組み）をアップデートし、見慣れた風景や当たり前の意味を考えること。それが、社会の中で機能するアートの役割と考えている。

拙著『観客が生み出すアートマーケティング』において、観客にとっては「文脈（コンテキスト）が価値を決定する」と論じた。モノやコトそのものに絶対的な価値があるわけではない。それがどのような「文脈」に置かれるかによって、ゴミにもなれば宝物にもなる。マーケティングにおいて「文脈を作る」とは、観客を単なる「消費者」として扱うのではなく、意味の「生産者」へと変容させるための「外部環境」をデザインすることを指す。観客が自らの記憶や経験——これを「内部状態（メモリーボックス）」と呼ぶ——と、目の前の現象を結びつけ、そこに固有の価値を見出すプロセスを誘発する。この「価値づけ」の仕掛けこそが、アートプロジェクトにおけるコミュニケーション・デザインと考えている。本ゼミのプロジェクト「おさがりターミナル」は、この理論の実践的検証であった。学生たちが企画書で掲げた「学内における心理的安全性の高いサードプレイスの

創出」という目的は、単なる不用品の交換会ではない。彼らは「図書館」という、本来は静寂と個人学習のためにデザインされた規律ある文脈の中に、あえて「おさがり」という他者の気配を濃厚に纏った媒介物を介入させた。これにより、無機質な通過点は、見知らぬ誰かと縁を結ぶ「ターミナル」へと意味を書き換えられた。地域型芸術祭のような大規模な「ハレ」の場ではなく、大学という日常的な「ケ」の場において、いかにして「文脈のデザイン」が行為の変容——立ち止まり、手に取り、見知らぬ誰かを想像する——を生み出すか。学生たちは、什器の配置、ポップの言葉、ルールの設定といった細部を通じて、その実験を遂行した。先日参加した文化経済学会の講演会において、スポーツ分野の事例が議論に上がった。「スポーツはルールという文脈が明確であり、参加のハードルが低いが、アートはその文脈共有が難しい」という趣旨の話だ。確かに、現代アートはしばしば「分からない」と敬遠される。しかし、本プロジェクトは「おさがり＝物々交換」という、誰もが理解できる日常的なルール（文脈）を導入することで、アートに関心のない層も当事者として巻き込んだ。彼らは古着や古本というモノの流通網ではなく、それを通じて交わされる想いの流通網を作る当事者となった。このZineが、その文脈形成のプロセスの貴重なアーカイヴとなることを期待している。

OSAGARI TERMINAL | つながりの記録

発行日：2026 年 1 月 19 日

主催：青山学院大学総合文化政策学部 佐野ゼミ
協力：酒井貴史／奥多摩美術研究所
編集・デザイン：李生美
写真：横山渚

